

小児に人工呼吸 コロナ禍で低下

新型コロナウイルス禍以降、食事による窒息や水に溺れるなどで心停止した子どもに感染対策のため人工呼吸が控えられたことで、救えるはずの命が失われていた可能性があることを岡山大学の小原隆史講師(小児救急・集中治療)らの研究グループが明らかにした。全国で起こった小児の心停止事例の分析で、人工呼吸の実施率が低下していた。胸骨圧迫(心臓マッサージ)だけの蘇生法の死亡リスクが高いことも分かり、小原講師は「小児への人工呼吸の重要性が改めて示された」と話している。(水嶋佑香)

消防庁のデータで、2017～21年に病院外で発生した17歳以下の心停止7162件のうち、目撃者が心肺蘇生した3352件を分析した。コロナ禍前の17～19年は心臓マッサージに加えて30%以上で人工呼吸が行われたが、20年は26・2%、21年は16・9%に減った。追加調査では22、23年も人工呼吸が15%程度にとどまっていた。

心停止蘇生法 岡山大が分析



マスクの使い方を示し、人工呼吸の実施率アップを呼びかける小原講師

工呼吸の実施低下と死亡リスクを踏まえると、20～21年で年10・7人の救えなかった命が失われていたと推計された。

「胸骨圧迫のみ」は高リスク

呼吸障害が原因で、肺に酸素を送るため、口から空気を送り込む人工呼吸を含む蘇生法が必要とされている。ところがコロナ禍では、感染対策の一環で心臓そのものが停止の原因になることが多い成人には「人工呼吸を行わない」との方針が関係団体などから出され、小児も敬遠されるようになったという。

小原講師は「人工呼吸の重要性を知識として知っておいてほしい」と強調。コロナ感染への懸念を払拭するため、人工呼吸用マスクを学校や地域の拠点に自動体外式除細動器(AED)とともに配置することや、消防などによる蘇生法の講習で小児への人工呼吸の周知を呼びかけている。

